

慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resources

Title	慶應義塾図書館蔵「釈迦の本地」解題・翻刻
Sub Title	
Author	石川, 透(Ishikawa, Toru)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2002
Jtitle	三田國文 No.36 (2002. 6) ,p.47- 55
JaLC DOI	10.14991/002.20020600-0047
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20020600-0047

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾図書館蔵「釈迦の本地」解題・翻刻

石川 透

解題

古来、釈迦の一代記を記したものは数多くあるが、室町時代を中心に物語ふうにしたのが、室町物語『釈迦の本地』である。仏教の創始者の物語であるから、さまざまの写本が現在に伝えられている。慶應義塾図書館には、『雪山童子』と題する室町後期の写本もあり、すでに翻刻もなされているが、それとは別に、今回紹介する古写本が存在する。

本書については、松本隆信氏が「増訂室町時代物語類現存本簡明目録」(『御伽草子の世界』、一九八二年八月)において、C二系統に分類している。C系統は、版本の系統を含み、写本の数も多いのであるが、C二系統は、松本氏の分類では、本書のみである。

本書は、くせのある文字で記され、誤写と思われる箇所も相当に多い。また、これまで指摘されてこなかったが、本書は、『釈迦の本地』の前半部分しか存在していない。さらには、本書の奥書がある最後の丁は、紙質も異なり、後補であると思われる。このように、多くの問題が残されている写本ではあるが、

古写本であることには変わりなく、異本の研究にも役に立つであらう。

本書の書誌は以下の通り。

所蔵、慶應義塾図書館

番号、一〇X―三三六

形態、袋綴、一冊

時代、「室町末江戸初期」写

寸法、縦二六・七糎、横一九・九糎

表紙、濃緑色表紙

外題、なし

内題、なし

字高、二二・四糎

料紙、斐紙

行数、半葉八行

丁数、二九丁

奥書、「元和七年」の奥書があるが後補

印記、「慶應義塾図書館蔵」「月明荘」(朱印)

翻刻に際して、本文は底本のおもかげを残すように努めたが、漢字・異体字はおおむね現行書体に改めた。また、私に句点・読点・「」括弧等を記し、改行も加えて読解の便宜をはかったが、煩瑣になるので(ママ)は記さなかった。小字の「ノ」「ヲ」等は、本行に平仮名で記した。見せ消しは(へ)、補入は(へ)、割書は(へ)に入れて示した。虫損部分はおよその字数を□にして掲出した。

〔釈迦の本地〕

釈尊は、(今)始而仏に成給ふと思へは、五百甚伝九億こふ寄、当先の仏にてまします。八千度迄、しやはに往來し給て、三千大千世界に、身命を捨給わすと云事なし。

去は、抑も、しやくそん、御おんとくに漏す。是は、ひとへに、衆生のためなり。有時は、御身大地になけて、衆生の言にかわり、又、王子と成ては、望の者をたすけ、説善の童子成ては、四句の文に御身を替へ、有時は、此文(を)わしの嶺にて、「諸行無常、是生滅法」と、はんけひ、こくふにとなふ。

童子、是を聞給へ(い)、尋り御覽すれば、鬼也。童子、の給わく、「諸行無生と唱へつるは、なんちか」との給ひける。「四句の文と申。去は、残りはんけひを唱へよ」との給ふ。

鬼のいわく、「此山に、日数経て候へとも、いまた、食をくわす候間、かつゑて物かいわれぬ」と申せば、「なんちかうへをは、何にて助へき」と問給へは、「鬼人の身にて候へは、人のあたゝ

かなる、しゝむらをたへ候へは、忽、たすかり候」と申。

童子の言か、「去は、残りの文を唱へよ。聽聞而、其後者、丸か身をあたゑん」との給ふ。「去は、唱ぬ」と申。則、唱。童子は、此銘文を、木葉に書付、「諸行無常、是生滅法、生滅々已、寂滅為樂」、「けにく、諸行は無生」(常)也。是生は滅法也。生而は滅し、滅てはすくひ、唯、寂滅以樂を遂り。今、我、此文を得たり。末世の衆生のため」とて、鬼人の有谷へそ下り給ふ。

後を還り見は、ひわ石、霞をへたて、つの嶺者遠く成、鬼人の有所は近く成、心ほそくは思へとも、未来種行濟度のために、四句の文に、御身を替へて、懸る谷の鬼の口へ入給へは、八葉の蓮花に請とめ、鬼人、申様、「我は、是、誠の鬼にあらず。本地、ひるしやなふつのけしんなり。童子の心指を奉見たため也。抑、諸行無常と云は、つるきの山を越也。是生滅法と云は、無常菩提にのほる、上の橋也。寂滅已樂と云は、則、浄土へ參乗物也」。

童子、此法一心余の理を、悟りたまひて、至広業依の信意を請給ひ、此四句のけの其中に、八万四千の仏法納れり。童子八葉の蓮花に生し給ひて、文を唱へ、の給わく、「鬼人、八葉の蓮花に請留、説善(童子)一体、釈迦尊」と唱へ、心実貴以説善童子、釈迦如来とけんし給ふ。

しゆみせん依南、拾六太国之中に、皆等国と申国有。王治給ひて寄已來、八万四千拾六代目の王をは、しゝきやう王と申。彼王の御子、四人まします。第一をは、上本王、しやううしきじや方遍而、目出度、王子、大日如来のけしん。第二をは、国本

王と申、六天の魔王のけしんなり。第三をは、わく本王と申也。第四をは、かんろ本王と申。

然に、彼上本大王、御年五拾に及給ふ迄、王子禿人ましま(さ)す。大王、是を歎き給ひて、有時、まさしき僧人を食て、せんし有けるは、「都内に、代を次へき王子、生み給ふへき后やましますか」と御尋有ければ、僧人、せんしを承、そふもん申、「此国の内、長者有。名をは、説光長者、二人のひめ君有。禿人は、まやふ人と申。禿人は、けふとんみと申。彼まやふ人を迎取、后とかしつき給は、其御腹に、必ましますへき」由、うらなひ申ければ、太王、大きに祝給ひ、臙而迎取奉り、一の后と祝給ひて、二世の御契り、浅からず思食ほとに、まやふ人、御すひめん有□。

しやか如来、人間の腹にやとり、仏法のたねを次、未来衆生濟度の御ため、本覺の月明に、又、發生の御身を、皆等生に現し、たん上を、菩提種の本にせんし、法をこくふに説、ねはんをおこし、なしやうにしめしたまはんために、上本大王の御子、まやふ人を母と定奉覽とて、脇下寄入たまふと、御覽しければ、后、臙而、御懐人の心ちにてそ、まします。

去は、御懐人の間、種々のきとく有。枯たる木に、花咲、みなり、(為)老ものも、参て拝み奉は、若成、病者成者も、奉拜者、病、忽になをり、しやけん成ものも、慈悲の心を発、おろか成ものも、ゆたかになり、惣而、しやまけたうにいたる迄、拝しおかみ奉もの、しやうしきに成すと云事なし。如何様の、種々のきとくのすひさう《也》。其数多。

去程に、ねんかうも替り、正承元□甲寅、卯月八日の日中に、

しやくせんたんの木の本にて、生れ給ひける。大地、六しゆにしんとふ而、見明の御《覺》(衆)、こくふにみちく、四大大王来給ひて、おかみ給へり。四方の草木、雲い寄は、五色の光明か、やき、金銀しゆ玉、七珍万宝、こくふ寄来臨而、いきやうくんする也。有得国か寄こくふ、其数二万四千人、上本大王は参給ふ。

たんしやう有て、七日と申に、四方に向て、七足あゆみ給へは、御足の下寄蓮花開けり。太子の御足を請奉り、光明十方を照給ふ。左の御手以天を指、右の御手を以地を指、「天上天下唯我とくそん」と唱給へり。此心は、「天にも地にも、只、我一人貴」と、の給へり。

なた、はつなたの龍来、すいたうの荷を出し、うふ湯参せ奉り、七多太子と申ける。懸りける処に、生死無常のかなしさは、まやふ人、太子を生み奉り、七日と申に、花の御姿を、無常の風にさそわれ給ひて、はかなくならせ給ひける。

上本大王を始奉り、一天の暗闇、中く不及申に。太子をは、けふとんみ、取上給ひて、箱くみ給ふ。五百人のめのと、いつきかしつき奉り、去程に、月日漸く送り迎、三年に成給ふ。父大王、の給はく、「七歳にも成ならは、世をゆつり参せん」と、悦給ひける。

かくて、七歳の夏の比、鳥の、すへ虫をくわへて来りけるを、御覽して、菩提心を発、思食けるは、「むしくわう、こふる。今に至迄、山野のけたもの、かふかのうるくすに至迄、皆二親有。いわや、丸は、五百六億の主そかし。父大王は、ましませとも、母と云人なし。天なくしては雨ふらず、地なくしては草木生ず。

母なくしては、生すへからず」とて、公行大臣にとわせ給へは、かくと申人もなし。

太子、御泪をなかし給ひて、有時、けふとんみに申させ給ふやうは、「抑、鳥類けた物に至迄、一親有。丸は母と申人なし」との給へければ、けふとんみ、誠に哀に思食て、なかるゝ御泪をおさへて、申させ給ふ、「かなしきかなや、太子、未しらせたまわすや、御母は、説覚長者姫君、まやふ人として、わらわかためには、あね君也。太子をうみ奉りて、七日と申□、はかなくならせ給ひし時、わらか取上奉りて、はや七歳に成給ふ」。

太子、此由、つくくくと聞召て、「哀、はかなかりける丸か心かな。会者定離の習ひ、生ずるものは必ず死身を持たなから、母をたすくるといとなみなくして、一天の主、はんしやうの身にほたされて、二度、三つの古郷へ還ぬ事の口惜さよ」と思召。

「千秋万歳といのる身も、今日を不知。命は水辺のあわのことし。魂は老鳥のことし。かたち、破ぬれば、留魂もなし。かはねを野へに捨ぬれば、二度、其いせいなし。然に、其身さへなは、今生の余波もなかるへきに、善悪の憚(中)(重)に寄て、各くしゆくの地獄に落、今生にてなせる罪業悉請くへし。

何事も、石の火の間、いとなみ也。不定世界の何を(は)こせんや。ゑひくわと云も、まとしき□云も、唯夢中の夢、まほろしの内のまほろし也。めいと世界は、きせんをもきらわす。去は、御母まやふ人も、此雲いを出給ひて、御供(中)(申)人もなく、くわうせん、三つの苦能を請ましますらん。丸か死ての其後は、母まやふ人をは、誰か弔る參。然は、五百六億の国を捨て、何ならず。発心をして、母(を)の菩提を弔奉覽」と思

食、七歳の御歳寄、菩提心を発給ひける。

父大王、是を聞食給ひて、僧人を食て、被仰有けるは、「太子にわうさうましますか、わうさうましまさは、うらなひ奉覽」と、せんし有ければ、僧人、いちく算書を開、申けるは、「王相、目出度候」と申。

僧人か名をはあひとふと申。彼あひとふ、申様、「太子、王相ましますとは申ながら、仏法僧王まします。十九にて、王宮を出、たんとくせん嶺にて、御出家有て、御歳、是にて、御身皆、こんしきと成給ひて、仏法を世に説広、衆生をさひとし給《ひ》ぬ。其時、此おきな、とろくして、仏法の御名を、則聽聞せん事、猶寄以、嬉敷御事、忝」と申。

大王、聞食、太氣に驚給ひて、けきりん、以外成。

然処に、往淨寄北、式百五拾里を去て、山有。名をは、淺多と云。彼山に住給ふ仙人、大王へ飛來て、の給わく、「七多太子は、仏法の太子と成給ひ候へし。某は、三世ろつふして、去に、偽なし」とて、本山をそ飛還り給ふ。

其時、相東か申事、(誠に)成て、御審めける。此事、大王嘆き給ひて、「如何くかすへき。太子の心を慰奉へき」と、せんし成。公行大臣、せんき有て、先、四方に四季の山をつき、御永覽成。

東には、春の有様、南には、夏の有様、西に、秋の有様、北には、冬の姿。臙而、太子、行向をすゝめ申されける。

太子、先、東春の有様を御永覽有。見、明野にをける白露は、残りの雪かと疑れ、はや、うす霞梢には、もゝさへつりの鶯、とうかん、せひかんの柳の枝、梅か小枝に、嵐や花をさそふ覽、

松に懸れる藤なみの、立帰る也。かりかねの鳴音も、いとゝ哀成る。

太子、此有様を御覽して、いとゝ、無常の御心を催所に、年八拾余り成老翁、行向を拝み奉りければ、太子、臣下以、「如何成者そ」と、せんし有。

老人、答申様、「我は、是、若かりし時、二人の親にかしつかれ、七珍万宝に、あきみちつれとも、何事も、唯、夢まほろしと成。既八十に余りける。かみには、しもを載、ひたひには、なみを被寄、腰かゝみ、六根不安、昔は人を嘲り、今は人に云せめられ、いにしへをなすわさ、皆是、罪過也。死へき今日を不知。然は、必地獄に落、各々、苦妙を請へきや。君も、今、百官万臣にいねふせら（れ）て、たのしみの永過に、ほこりたまふとも、老か程なく来りなは、花の御姿も色替り、青柳のひんはつは、皆とふしみをみたせる。よく足手の御つま先にいたる迄、大六天、一すひ五十年の内に、翁か有様に、違給ふへからす」と申せは、太子、是を聞食、「本寄、唐人ましまは、理也」と思食、又、南天に行向成、夏の気色を御覽すれば、卯花、かきつはた、うらむらさき、朝顔の日影しほる有様も、物哀なり。夕暮に、山時鳥の音つれも、いとゝすこさのまさりける。岩間の水にすゝみとり、昔の人之待たへて、花たち花の匂ひには、たか袖懸てかほる覽。池のはちすのそよめきに、こふりにしまぬ心哉。

秋を哀のさよ風も、身にしみくと悲きに、又、庭《主》（上）に、病者有。太子、これを御覽して、「如何成者そ」とせんし有。病人、答て申様、「以前、永覽有し時の翁也。軽き身に、重き

病を請、寔、病苦也。いやしきも、必又、老少不定の業と也。有時は、次第不円也。鬼魔の使を得、本病のいんゑんなり。病の次第、百壹病つゝ合、四百四病也。病遊は、五体不安、かたちをとろひ、色替り、身心をなやます。坊主病者、苦の中の地獄也。又、死のものとひ也。誰かいとひ、誰か遁つ覽や。身心なやます時は、仏法種行も、龍つの行法ならず。行法かけぬれば、何くふ（ふ）も成へからす。人は、皆、地水火風空以借に造立する身体也。一体違は病と成、時の三けん合力も、必、七珍万宝もあたなり。生類眷属もたすけず。始、せんはんしやうの身下、せんけんかの類も、病を請事かくのごとし」。

其時、太子、臣下以、彼おきなに、水をあたへたまふけるに、世間のうひ無常をくわんし、又、西面を祈、秋の気色を御覽すれば、露せきかくる女郎花、萩か立へのうすむらさき、木々の紅葉もそ（よ）め渡る、秋を時雨の山際、をしかの音もすさましく、身にしみくと吹風は、誰を恨のまくすはら、うらかれ染草村に、万の虫の鳴音迄、物哀成折節に、又、昨日のおきな、今日は死人と成て、爰後世に引さらし、しゝむらやふれて、白骨は（男）女に替す。今日の行向は、殊に哀を催す。

太子、これを御覽して、正蓮花の御眼寄、御泪をなかし給ひける。弥々、御たうちんふかかりける。

北面に行向成、冬の気色を御覽すれば、雪は霜の山にみち、松の梢も見えわかつ。まかきか本のしらさきは、うつろひはつるも哀也。生死にまよふ虫の音の、かすかに残る下草に、雪の隙、朝道たへて、とをりとめたる岩間の水の、水とちたるあしろの魚之、寄へもなき有様を、残す御覽して、哀催す所に、薄

墨染の衣きたる僧（有）。

太子、これを御覽して、臣下以、御尋有（ければ）、僧、答て申様、「我は、是、浮世いとひ、無常を関する聖也」と申。

太子、重而せんし有、「無常をくわんするとは、如何成事ぞ」。僧の曰く、「其、三界は、うひの住かなり。生は死のもとひ也。宵光朝露、石の火のごとし。魂肉身を去て、中に趣則者、高もいやしきも、只一人、広くたる野へに迷。日数は、罪に寄て多少有。かくて、めいとに至、こふに寄て、地獄、かき、ちくしやう、しゆら、人、天、八寒八熱の苦を請。有時は、獄そつ、あほふらせつか慮り、くわうてつたうを香と無。有時は、明火の上に繩をはりて、せめらるゝ。眼をぬひて、はりをさし、舌をぬいて、くひを打、頭に火を戴き、足に鉄の火をふませ、滅すれば生而、頭をこんりうして、夜ひるのひまもなく、せめらるゝ。如何様にては、いつたすかるへきに、千こふ万こふにも出かたき。然る処を出なから、結句、人間生れなし侍に、仏法を聞なから、一段の名理にたふされて、むなしく又、本の三つのこきやうへ帰ぬ事、南無うらめしきは、五飲本能、いとふへきは、苦の三業、懸事有を聞なから、此度、生死の苦界を出すは、未來、いかてか、一かんの浮木にも合ぬか。故に、三界六道出て、生業の門に入なん事を、いとなみ給へ。君も、十せん位のそなわり給ふとも、此度、いとひ給はずは、必、悪道に落給ふへしと、菩提心を発て、ひとへに、仏道を願給は、至広業の罪、悉く消書滅、忽に本覺の如来と成給ふへし」と申せは、太子、聞食、「丸も、何か、砂門之姿と成覽」と思食、御泪と共に、行向成、弥々、御心を留たまわす。

「如何せん」と、皆々、歎きたまひつゝ、公行大臣せんき有て、各々申されけるは、「人間の心を留には、ふうふの道成と、聞へける。如何成人をか、后と祝申へき」とて、「五百人の大臣の中に、こやす大臣の姫君に、こやすたら女とて、おわします。三拾さう、しまわうごんの御姿にておはします」と申。

大王、聞食、御悅限なし。文をあそはされて、安大臣へ被遣るゝ。安大臣の御返事に曰く、「一人之上下をきらわす、鉄のまを七枚重而、其間四拾里に而、いとをししたる人を、むこに取へし」と申されける。

太子、是を聞食て、「丸も見物せん」とて、安大臣の御本へ行向有。此由、御天竺、披露有ければ、きせん上下参種て、うんかのこつく也。我もくといけれ共、杵枚もいとをし申人もなし。

爰に、国本王の御嫡子、大破たつたと申人、来りて、いたまひければ、此人は、経をそしり、出家を見は、忽いころし、仏法のできと成人也。しゆみせん寄北の谷に、鉄の城を四拾四町に拵、六万八千人のけたうをあつめて、眷属とし、かひにまかせて、ほこり給ふ人也。

大波、被仰有けるは、「我、此まをいとをし、安大臣のむこにならん」と申、い給ふ。ねんのふ、五枚はいとをしたまへとも、残り二枚とをらす。それ、大波、被仰けるは、「天下に、我にまさるゝ人あら」と、いかりけれとも、安大臣、もちひたまわす。

懸ける所に、七多太子は、此由御覽して、「我、後のほしきには有す。末代の衆生の、みせし（め）のために」とて、御年拾

六歳にして、鉄の御秘蔵の御弓に、御矢を番、よつひ(い)て、しはしかためて、はなし給へは、七枚のまとをは、羽中をせめてたちにつけり。

御けひほくのらく、安大臣の御むこに、定給ひける。此世の御契り、浅からず。然とも、弥々、浮世の有様の、あたる事をくわんし、御たうしんふかく成給ふ。「丸か年五拾に余り、只吾人有王子也。太子、王宮を出るは、一天の暗闇成へし」。安たら女の御心内、さそ思やられて哀也。

彼安たら女は、御天竺にかくれなき人也。見人聞人、心をうこかさ(た)るはなかりけり。七多太子、前世の契り浅すして、此度、多んわうをむつ(ふ)事、ひよくのかたらい、深玉のすたれの内は、月の光、はやくうつる事をうらみ、あつきの窓に、やもめからすの音を哀み、片時も立離へきを、歎き給ふ。

雖然と、太子は、(無)常菩提の御心、深かりければ、王宮を出、誠の道に入と思食定つ、常のむつ事こまやかに、安たら女は、何や覽、むね打さわきつ、「契り末の如何成覽」と、歎き悲み思食は、太子の御年、拾三の秋の比寄、出家の御暇乞の給へとも、出したまわす。大裏をは、鉄のつひ地を四拾定につき、太子を出し奉覽とのたくみともあり。千人の兵子をすへ、四の門をかため、けひこせされ、太子をは、木の内の鳥の如く、出し給ふへき様もなし。

有時、太子、一の御馬やに立たまひける。こんてひと云駒に向て、仰けるは、「己は、こくふをかける能有。丸をたんとくせん迄、送り付て被参よ」と、せんしありければ、彼駒、ひさまつひて、泪をそなかしける。

又、しやぬくと云とねりをして、「こんてい駒に鞍を置て、丸をたんとくせん迄送付よ」とのせんし也。しやぬくは、太子のせんしを承、思煩てそ有けるか、君のせんしを背ては不可叶と(思)、彼駒に鞍を寄、南の門にそ引立ける。

太子は、御年拾九、壬申の貳月八日の夜半に、御心つよくも思切給ひて、出させたまふか、又立帰り、君の御枕に近付、驚かし奉り、の給わく、「日比申つる事、唯今袂を別出候へは、目出度、仏法執行をし、三界とくそんと習、第一番の所にこゑ参せん。御余波は、さまくをしけれとも、后も思食切給へ。如何様候とも、つひには、そひはつましき浮世也。これを徒に暮し、悪道に落候はん事、口惜御事也。仏法の師と成は、后も我も諸共に、安楽世界に生ぬ事、何疑あるへからず」との給へは、后は、悲ふかくましまさとも、是を限のあつきなれば、人目も恥す、太子の御たもとにすかりつき、兎角の御言葉もなく、たゝ泪にそ、むせはせたまふ。

「后も能々思切給へ」とて、「心よわくてかなふまし」と思食、余波の御たもとを引切給ひて、しやりん天を出給ふ。后は、あ(か)ぬ別のたまのこて、只一人ふしつみ給ひけり。

太子は、(い)たけしゆ上の御くつをはき、こんてい駒に打乗給ひて有ければ、四門の兵子、用心きひしくて、出給ふへき様もなし。然りける所に、四天王あま下給へは(ひて)、太子のめされたる、こんてい駒の足を指上て、四拾てやうのつひ地を取り出し、心懸の山へそ趣給ふ。

太子、常の行向には、公行大臣、百官万民に、前後左右をいねふせられておはしますに、菩提の道に入給へは、しやぬくと

ねり計也。太子、たんとくせんのふもとに、とくりふとくしゆ山と云処を通給ふ。

此山のふもとに、一切のけたうあつまりて、せんきするやう、「七多太子は、菩提心を発、今王宮を出て、たんとくせんに入申さぬ。此人、愛につき給は、わらはか悪業ほんのふも成へからず」とて、こくふにあつまりて、大はんしやくを、太子の上へなげ懸奉りければ、帰而、けたうとも、みちんと成儘、太子は、たんとくせんの大波等衆と云、此本に、付給ふ。

愛に、せん人おわします。本地、願自《在》《在》王仏のけしん也。三世を鏡のことくしり、八万証諸経を明給ふ仙人也。太子の御心指を奉見ために、三日間隠て、相給わす。

其時、太子、御泪をなかし、尊声によはわり給ひける。「我、生死を離、仏法を為聞に、丸か身を仙人に奉覧」と、よはわり給へは、其時、仙人来り給て、太子に相給ふ。

「如何成人にてまします。とり、けたものたにも通ぬほらへ、尋来給そ」と、問たまへは、太子、答て曰く、「我は、御天竺に、皆等正、五百六億の主、上梵大王の子にて候か、丸か母まやふ人、我を生み置かれ、此世はかなく成給ふ事、悲敷候に、其菩提を申奉覧かために、五百六億の位を捨て、是迄參候」との給へは、仙人之曰く、「去は、御姿を替へ候得」とて、「留天三界忠、音相不入段、貴窓入文意、心至法音舎」と、三返唱て、太子、御出家成。御名をは、くとん坊とそ付給ふ。

れうらきんしゆの衣を、あさの衣にぬきかへ給へて、しやぬくとねりに被仰有様は、「此かみをは、けふみに參よ。年月、一すちを千すちとなて給ひ、かみ、唯今そりおとして候也。こん

てい駒とかむりをは、父大王に參せよ。衣とはたのまむりをは、安たら女、參よ。今はあぬわかれを思切候へは、さこそ悲敷も、又は御恨も候はん。なれとも、誠の道に入なは、後には嬉敷思食候へし。此世界と申は、抑も罪深事の身也。夢の中のすまひ、まほろしの間敷也。別を歎き候共、浮世をいとひ、仏道をねかひたまは□、必廻合ぬ事、疑有へからず」と、こまくと文をあそはして、たひにけり。

其時、しやぬく、なくなく申けるは、「都寄是迄御供申、參事も、御出家に成給ひ候は、某も、出家仕、宮仕申へしと存候に、王宮へ帰れと被仰候は、返々も悲敷候」とて、廳而、もとゆひを切覧とする。

太子、重而被仰有ける、「一かのなかれをくみ、一しゆの影にやとる事も、此は多生のゑん也。いわや、しゆうくと成事、ひなきゑん也。然は、丸か命を背へからず。其上、王宮を忍出て、何方へ行つ覧も、しらせ給わす。父大王始而、百官万民に至迄、一天の暗闇、さそ有覧。夫に付而も、様々形見を奉、御心をは慰奉覧こそ、丸か二世の御供なれ。しゆくんは、七生の契りなり」と、様々にすかし給へは、「被仰を背へからず」とて、なくなく御形見の物を給りつ、こんてい駒の足なみも、むなしく引て、王宮へそ帰ける。心の内、思やられて哀也。

さなきたに、たんとくせんは、せきかんかとそひへ、借にも人間の通ひなし。たまなく聞物とは、山河木石、いかつちけわしき雨の音計、是や此、めいとたひかと思はれて、物すこき事限なし。少もまところむへきやうあらされは、王宮は、夢にもみゆる事もなし。三歳の雪、谷のつらくもとけやらす。

鹿の通路跡たへて、遠近人も通ねは、道を問へきやうもなし。儲も、太子をは、たんとくせんほらに、只一人捨置奉り、帰る心の道しゆん、泪は袖にせきあへす、悲む音は、天にもひく計也。

こんてい駒も、太子の御余波を惜み、黄成泪をそなかしける。たんとくせんへ、太子をくして飛給ひしは、唯一時の間也。しやぬくは、明ぬ暮ぬとせしほとに、三歳三月と申に、王宮へそ帰りける。様々の御形見の物とも、取出し参せける。歎き悲み給事、今更に、都の内、かきくらしそたへたりける。

后安たら女は、しやぬくか袖にすかり付、被仰けるは、「太子の御出家而おわします、たんとくせんゑ、くして行」とて、なきいらせ給ふ御有様、目もあてられず哀也。
様々の御事共、御座候へ共、次巻有之也。

稽任之時

元和七年無神月吉日

学誉（花押）